ヨコハマ
トリエンナーレ
2014

ヨコハマトリエンナーレ 2014　教育プログラム

中高生のためのヨコトリ教室

船長の航海日誌

世界の中心には発見の海がある

第1回 5/18［日］
逢坂委員長からお話を聞く
関グループ長と美術館探検

第3回 7/6［日］
新妻健悦さんのワークショップ
「つくることを通して発見する表現」を体験する

第2回 6/15［日］
からっぽの展示室を見に行く
横浜美術館と新港ピア

第4回 7/22［火］
ヨコトリ展示準備中を見に行く
天野キュレトリアルヘッドと美術館を、森村ADと新港ピアを巡る

第5回 8/4［月］8/7［木］
森村ADとヨコトリ会場を巡り
解説を聞く

夏の教室❶

中高生のためのヨコトリ教室［概要］

全13回延べ16日の長期プログラム（5〜10月）。ヨコハマトリエンナーレ2014と美術について知り、夏休み中の8月に小学4〜6年生を対象にした「ヨコトリ号こども探検隊」のプログラムを計画・実施。終了後にまとめの本記録誌を編集した。

日時　**準備編**　5/18（日）、6/15（日）、7/6（日）、7/22（火）、8/4（月）、8/11（月）、8/12（火）
いずれも10:15〜12:15
8/7（木）12:00〜18:00日曜美術館撮影
航海編　夏の教室❷ ヨコトリ号こども探検隊
①8/18（月）、8/19（火）
②8/24（日）、8/25（月）
いずれも9:15〜14:15（ランチ交流会ふくむ）
※2日連続のプログラム
①と②で参加者を分ける
記録編　9/7（日）、9/14（日）、9/21（日）、10/19（日）いずれも10:15〜12:15

会場　横浜美術館8Fおよび展示室、新港ピア
対象　中学生と高校生
参加人数　23名
参加費　無料

第1回 5/18［日］
横浜トリエンナーレってなんだろう?
横浜トリエンナーレ組織委員会委員長 逢坂恵理子
美術館を探検
横浜美術館教育普及グループ長 関淳一
今日のヒトコト ◎参加人数:16名

第2回 6/15［日］
美術って何だろう
ヨコハマトリエンナーレ2014
アーティスティック・ディレクター 森村泰昌
からっぽの展示室を見に行く
横浜美術館会場（案内:アーティスティック・ディレクター森村泰昌）、新港ピア会場
今日のヒトコト ◎参加人数:21名

第3回 7/6［日］ワークショップ
つくることを通して発見する表現
アトリエ・コパン主宰 新妻健悦
◎参加人数:15名

第4回 7/22［火］ヨコトリ展示準備中を見に行く
横浜美術館会場（案内:ヨコハマトリエンナーレ2014キュレトリアルヘッド 天野太郎）
新港ピア会場（案内:アーティスティック・ディレクター森村泰昌）
今日のヒトコト ◎参加人数:18名

第5回 森村ADとヨコトリ会場を巡る
8/4［月］A班｜**8/7［木］**B班（日曜美術館撮影）
今日のヒトコト ◎参加人数:8/4（月）13名、8/7（木）8名

第6回 8/11［月］ ヨコトリ号こども探検隊 計画・準備①
6グループに分かれて、ギャラリー・ツアーの具体案を作成 ◎参加人数:21名

第7回 8/12［火］ ヨコトリ号こども探検隊 計画・準備②
6グループに分かれて、ワークショップの具体案を作成
◎参加人数:21名

第8回｜第9回 ヨコトリ号こども探検隊
8/18［月］、**8/19［火］**3グループが実施
8/24［日］、**8/25［月］**3グループが実施
今日のヒトコト ◎参加人数:8/18（月）9名、8/19（火）8名、8/24（日）12名、8/25（月）11名

第10回 9/7［日］ 記録誌をつくろう①
どんな記録誌をつくるか、各自案を作成・発表
有志による記録誌編集委員会発足
◎参加人数:18名

第11回 9/14［日］ 記録誌をつくろう②
編集委員会会議｜数種類の案にまとめる
記録誌名決定 ◎参加人数:8名

第12回 9/21［日］ 記録誌をつくろう③
編集委員会がデザイン事務所で打ち合わせ
デザイナーにプレゼンテーションし、相談
◎参加人数:9名

第13回 10/19［日］最終回
記録誌の表紙作成｜記録ビデオおよびスライドショーの鑑賞
今日のヒトコト ◎参加人数:18名

夏の教室❷

ヨコトリ号こども探検隊［概要］

中高生が考案したヨコハマトリエンナーレ2014を体験する小学生のためのプログラム。中高生と小学生が10人程度のグループでヨコトリを観覧し、ワークショップを体験。ランチタイムも含めてグループで交流した。

日時　①8/18（月）、8/19（火）
②8/24（日）、8/25（月）
いずれも9:45〜13:45（ランチ交流会ふくむ）
※2日連続のプログラム

会場　横浜美術館8Fおよび展示室、新港ピア
対象　小学4〜6年生
参加人数　8/18（月）19名、8/19（火）20名
8/24（日）19名、8/25（月）18名
参加費　無料

※まとめは06〜15ページ

「船長の航海日誌——世界の中心には発見の海がある——」発行にあたって

この冊子は、ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術:世界の中心には忘却の海がある」（2014年8月1日〜11月3日）の「夏の教室❶中高生のためのヨコトリ教室」と「夏の教室❷ヨコトリ号こども探険隊」のふたつのプログラムの記録誌である。■「中高生のためのヨコトリ教室」は、ヨコハマトリエンナーレ2014の開幕に先立ち、2014年5月にスタートした。参加した中高生は、逢坂委員長から国際展の話を聞き、森村アーティスティック・ディレクターと「からっぽの」展示室を見に行き、現代美術を理解するための新妻健悦さんのワークショップなど様々な体験をした。それは現代美術、ヨコトリ、展示準備の様子を知り、参加者とスタッフが少しずつ距離を縮めていく時間でもあった。■全7回の準備編を経て、中高生が小学生のために考案したギャラリー・ツアーとワークショップをおこなう航海編、「ヨコトリ号こども探険隊」を実施した。■そしてこの記録誌が、11月に完成し、半年にわたる「中高生のためのヨコトリ教室」が終了するのである。■さて、中高生と小学生がギャラリー・ツアーとワークショップ、昼食も共にする2日間、「ヨコトリ号こども探険隊」。それは、こんな風に始まった。■中高生と小学4〜6年生の混合グループが、ギャラリー・ツアーに出発した。横浜美術館のエントランスホールに設置された巨大な作品の前で、あるグループは立ち止まり、淡々と「アート・ビンっていうのはね」と話し始めた。小学生がそれに耳を傾ける。次々と言葉が出てくる訳ではないが、静かな空気が漂っている。中高生には、案内する作品の担当があり、ひとつ見終わると、次の作品へとゆるやかにグループで移動してゆく。私たちはその様子を離れた場所から見守った。小学生の視線は中高生へと注がれ、時折何か話しかけている。集中力も途切れることなく作品を見て回った後、部屋に戻りワークショップに取り掛かった。楽しげな笑い声や断続的な会話、制作に集中している沈黙なども挟みながら、部屋は活気と笑顔で満ちた。私たちはこの様子を部屋の片隅から見ていた。■昨年11月、森村さんから、年齢が異なる子ども達だけで、「お子様ランチでなく、フルコースのアートを子ども達に味わって欲しい」という話があった。これをふまえて、横浜美術館教育プロジェクトチームが実施案を作成した。■私たちは、「ヨコトリ号こども探険隊」の「船長」として、中高生を中心に据えなくてはならないと考えた。グループミーティングもスムーズだったわけではない。長い沈黙の時間や、話し合いが進展しないこともあった。私たちはなるべく介入せず、中高生の言葉に耳を傾け、時には問いかけ、道具や材料の準備を手伝った。■「ヨコトリ号こども探検隊」の朝、20人の小学生たちが部屋に入り、中高生と合流した時、この2日間をやり遂げられるのだろうか、という不安がよぎった。しかし、中高生は見事に小学生との2日間を終了した。「小学生は元気だなー、疲れた」「若い!」「（小学生に）good jobと言われて嬉しかった」と言って笑顔で帰っていった。■この記録誌「船長の航海日誌——世界の中心には発見の海がある——」も同様に、中高生全員が冊子の題名や内容を考え、有志の編集委員がその内容を整理し絞り込み、いくつかの要望を添えてデザイナーにデザインを依頼した。■参加者それぞれの体験は一様なものではなかったと思う。それらが忘却されたとしても、何かの機会にヨコトリや横浜美術館の記憶として思い出してくれることがあれば、と願っている。

横浜美術館　教育プロジェクトチーム

忘却

ヨコトリ号こども探検隊
ギャラリー・ツアー
2014年8月18日(月)、24日(日)｜横浜美術館

作家名
マイケル・ランディ
作品名
《アート・ビン》

本当にこれは
ゴミなんだろうか

物を捨てるとその存在を忘却(ぼうきゃく)してしまいます。
人の思いも忘却することがある。
だが、忘却した中に大切な思いもある。
これはそういうことを思い出すきっかけになる作品。

ゴミを簡単に捨てられなくなった。

ゴミ箱は“忘却のいれ物”だ。

ごみぼこ行き、

作家名
フェリックス・ゴンザレス=トレス
作品名
《「無題」(青い鏡)》
《「無題」(NRA—全米ライフル協会)》

副題の“青い鏡”は、その青い紙の使われかたは
それを手に取った人の考えが反映する、
そんな意味がこめられているのかもと思いました。

紙は作家の一部だと思って大切に扱っていました。

鏡を実際に使って
本を読んでみました!

作家名
ドラ・ガルシア
作品名
《華氏451度(1957年版)》

「華氏451度」という本は、本を読んではいけない、
もってはいけない、という近未来の世界を書いた作品。
ドラ・ガルシアは鏡文字を使い、
この世界を否定しました。

もし、周りの人、世界中の人が同じ考えしか
もっていなかったら…そう考えると、
とてもつまらない世界になってしまうと思う。

小さいのに
しっかり
してる!!

近くで見てみたら驚きが!

作家名
福岡(ふくおか) 道雄(みちお)
作品名
《何もすることがない》
《何もすることがない・10月(みみず)》

ミミズは作者の孤独(こどく)を表しているのか。

「何もすることがない」も、ここまで彫(ほ)ったら作品になる。

初

ヨコトリ号こども探検隊
ギャラリー・ツアー
2014年8月19日(火)、25日(月)｜新港ピア

舞台の周りにまで手作業で
スパンコールがつけられていて
とても華やかだった。

このトレーラーをつくるために
台湾まで行こうと思う気持ちが
すごいと思いました。

展開するとき、めちゃくちゃ
カッコよかった。

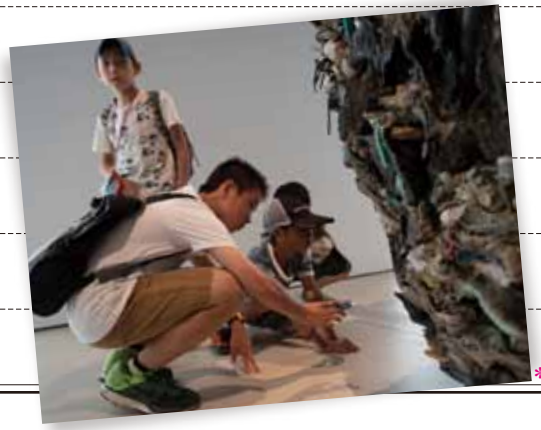
作家名
やなぎ みわ

作品名
**演劇公演「日輪の翼」のための
移動舞台車**

作品に使われた
海の大量のゴミ。
いったい、どれくらいの
ゴミが海に漂って
いるんだろう。

通り過ぎることのできない
圧倒的インパクト!

ビンやペットボトルがそのままでなく、
割れていたりへっこんでいたりしていた。



作家名
殿敷 侃

作品名
**《山口―日本海―二位ノ浜、
お好み焼き［重量約2トン］》**

空

「行こう行こう」といっているが
どこに行くんだろうか。
はっきりとはわからないが
作者の強い意志が感じられる。

アトリエの中がすごかった。
息がつまるような狭い空間なんだ
けれど、ずっとここにいたいと
思えた。鳥の絵が好きです。

作家名
松澤 宥

作家名
大竹 伸朗

作品名
《網膜屋／記憶濾過小屋》

今まで培ってきた記憶や感情を込めた
一冊の本のような作品。最初から読み直すことで
忘却してしまったことを思い出す。

ゴミの車といったらゴミの車かもしれない。
でも私は宝の車だと思う。

闇

学

ヨコトリ号こども探検隊
ワークショップ
2014年8月18日(月)、19日(火)

Aチーム
ゆかいな仲間たち
◉小羽祐介 ◉福長大河
◉柳原みず季 ◉龍寶眞樹

内容
1日目:紙を切って貼(は)って立体の街、森をつくる。切り取って余った紙はゴミになる。そのゴミを使って今度は海のようなものをつくり、ゴミも再利用できることを知ってもらう。
●
2日目:ひとりひとつの紙粘土(かみねんど)を使って忘れたいこと、忘れたくないこと、忘却(ぼうきゃく)のイメージ、印象に残った作品をつくる。

意図・ねらい
1日目:紙を切り、出てきたゴミを使ったのは、それを「ゴミ=いらない物」にしないで何かに役立てることはできないのか、と立ち止まって考えることと、実際にやってもらって、さらに理解できるように。
●
2日目:今回のイベントで見たりつくったりして感じた忘却へのイメージや、思い、印象に残った作品などを形にして忘却しないように残してほしいなと思った。

事前準備の通りできるか少し不安がありました。機会があったら、またこのような経験をしてみたいです。

このヨコトリで現代アートと向かい合うきっかけになった。

教えるやり方を学べたのはいい機会だとおもいます。

辛ければ楽しさあり
(きんちょうもあるけど楽しさもある)

Bチーム
鏡
◉荒井響心 ◉加藤涼
◉山下大悟

内容
1日目:ゴミ箱をつくったり、マイケル・ランディ《アート・ビン》の感想や自分の名前を鏡文字で書いてもらい、発表する。
●
2日目:ハンコをつくって押す。

意図・ねらい
少しでもトリエンナーレに興味を持ってもらい、作品について深く考えてもらう。トリエンナーレに関係のあるものをつくってもらって、トリエンナーレがどんなものなのか学んでもらう。美術(現代美術)を少しでも好きになってもらう。

僕は、このワークショップで「説明する難しさ」「計画を立てる難しさ」「触れ合う楽しさ」を学びました。また、知らない小学生と共に美術館を回るという経験ができてとてもよかったです。この2日間で学んだことを将来に活かせたらいいなと思いました。

小学生が意外とやんちゃな子でいっぱいで自分たちの考えたワークショップがとても楽しくできて嬉(うれ)しかったです。すぐに仲よくなれて、やりやすく、楽しんでできました。

やんちゃで楽しかった!

どんな人とも会話から。

ヨコトリ号こども探検隊
ワークショップ
2014年8月24日(日)、25日(月)

Cチーム
スタンプ
◉新井陸哉 ◉小畑紫
◉川原環希 ◉小林誠宗

内容
1日目:ハンコをつくり、大きな紙にみんなでスタンプしながら絵を描く。
●
2日目:みんなでスタンプした大きな紙を使って、自分の船をつくり、自分の作品を発表。

意図・ねらい
美術館に飾(かざ)ってある作品をピックアップして、それに関する作品制作をした。それによって作品の理解や制作する楽しさを伝えたかった。また、航海するということで船をつくった。

アイデアは物と人を動かす

森村さんの話を聞いたり、一緒にヨコトリを観たりして、作品の説明を聞くことで、より良い理解をする事ができた。

美術館をまわっているとき、小学生がゆっくり見ていて自分の気づかないところを教えてくれて人と見る美術館の楽しさが分かりました。

Dチーム
食いしんぼう
◉竹内勝彦 ◉原田怜愛
◉平田瑠美 ◉八柳発

内容
1日目:紙をくしゃくしゃにし、折り目をボールペンでなぞる。その後、点を3点打つ。ヤマトノリで紙に絵を描いた後、砂やシュレッダーの紙くずをかけ、サンドアートやシュレッダーのゴミアートをつくる。
●
2日目:忘れたくないことを芋(いも)に彫(ほ)り、スタンプして模様をつくる。

意図・ねらい
1日目:「忘れたいもの」を絵として可視化、他者と共有することで、「忘れたいもの」の中に潜(ひそ)む「大切なもの」、忘れるべきではないものの存在に気づいてもらう。
●
2日目:展覧会のテーマである「忘却(ぼうきゃく)」をより深く理解してもらうため、あえて時間が経てばくさってしまう芋という素材に「忘れたくないもの」を彫ることで、忘れたくないと思っていることも、いずれは失われてしまう、ということを知る。

自分の意見をしっかり言っていたからすごく話しやすかった

今回のプログラムのメインと言っても良い「ヨコトリ号こども探検隊」では、小学生達に作品の案内をしましたが、私は小学生達とのかかわりをあまりもったことが無く、とても新鮮(しんせん)な体験ができたと思います。

他の人と意見を共有しながら見ていくことで、新しい作品の魅力(みりょく)に気づけたり、相手の意見を吸収してより深く作品を観ることができるようになりました。

ワークショップでは、「大切なもの」「自分の忘れてしまったこと」などを思い出してもらえるように心がけていました。みんなとても真剣(しんけん)に考えてくれて楽しく過ごせたと思いました。

楽

Eチーム
女子部
◉秋葉澪 ◉菊地亜美
◉高橋ルイ ◉森本祐加

内容
1日目：ハンコ作り。いやな事、忘れたいこと、忘れたくないことを、フェリックス・ゴンザレス=トレスの《「無題」(NRA—全米ライフル協会)》と《「無題」(青い鏡)》の紙に書き、ミニ「アート・ビン」に捨てる!
●
2日目：スライムで、びんの中に忘却の海をつくる。

意図・ねらい
最初のハンコ作りはコミュニケーションを取って仲良くなる、お互いのことを知る、ドラ・ガルシアの作品のように鏡文字を意識してハンコを彫ってみよう、という意図で行いました。ゴンザレス=トレスの持って帰れる作品を実際に持ち帰る、そこに忘却したい事としたくない事を思い思いに書いてもらって、ミニ「アート・ビン」に捨てることで小学生達の記憶に残す、《アート・ビン》という作品を改めて理解してもらう。
スライムドーム作りは、1日目に小学生達に聞いた希望を叶えたワークショップでした。意味づけをするとしたら、忘却の海作りです。

「楽しかった!」最終日に小学生の口からこの言葉を聞けて、とてもうれしかったです。普段トリエンナーレを“見る側”なので、“作る側”として小学生の子と関わるのは、とても緊張しました。特に、なるべく難しい言葉を使わないで、分かりやすく説明するというのに苦戦し、ガイドブックやパンフレットを読み返したり、実際に何度も美術館に足を運びました。

1日目はみんな緊張していたので、最初の方は小学生たちとうまくコミュニケーションがとれなかった感じがありました。名札をスタンプでつくった時、戸惑うというかなにをしたらいいかわからない感じがありました(中高生が)。

ワークショップは1日目に聞いた「スノードームを作りたい!スライムで遊びたい!」という声を活かして、びんの中にスライムやビーズ、紙粘土などを使って海を再現したり、皆それぞれ試行錯誤しながら思い思いに作って楽しんでくれて良かったです。

良い流れ♡

視野が広がった気がするよ!

個性大事。

小学生にいっぱい刺激をもらいました。森村さんとまわって得たものとはまた違う良いものをもらったような気がします。

Fチーム
アドリ部
◉石井和哉 ◉小野翔太郎
◉種子田まいり ◉山下粧子

内容
1日目：中高生のつくったパズルをやりながら、タイトルの意味を考える。ジョゼフ・コーネルの作品のような自分の箱を制作する。
●
2日目：大きな紙に忘れたくない言葉、心に浮かんだ言葉を自由に書く。

意図・ねらい
小学生に今でしか制作できないものをつくってほしい。制作を通してヨコハマトリエンナーレに触れてほしい。

正直ひどく不安でした。(私自身もうまく出来ませんでした)小学生の作品の中には絶対こんな発想できないみたいな奴もあって凄く刺激を受けました。

実際に小学生を案内したり、一緒にワークショップをやったりしてみたら、結構楽しかったなと思いました。そして本番は、内容をしっかりと伝えることが出来たので良かったです。私は子どもが大好きなので、本番を楽しみにしながら今まで準備をしてきました。全体を通して、準備等大変なことも多くありましたが、結果的に当日、自分たちも含め、小学生も、みんなで楽しむことが出来たので良かったと思いました。

反省点は、計画よりもはやめに終わってしまい、余った時間をどうするか考えていなかったことです。

あとがき
ふたつのプログラムを終えて

中高生と半年という長い時間を共有したのは、ほとんど初めての経験と言っていい。この期間を通じて中高生の数少ない言葉、控えめな表情や態度の中に見える、意識の変化や成長を感じる瞬間に数多く立ち合わせてもらった。

普段は陸上の中距離競技やテニス、剣道などの部活に励み、陽に焼けた中高生が、作品に向き合う時の目の輝きは印象深かった。忙しい日々なのだろう、時には制服で来て、プログラムが終わったら、すぐにブラスバンドの練習に行くという生徒もいた。

新港ピアから横浜美術館へと歩いた時、「17歳の時に悩みはありましたか」と進路について突然尋ねられ、どう答えればよいものかと、慌てた。一方で、小学生と接する様子は日ごろ私たちに見せる表情とは異なり、実にしっかりとしたものだった。小学生ははじめから中高生を尊敬とあこがれの眼差しで見つめ、話しかけ、私たちおとなのスタッフには関心を示さなかった。それがわかった途端、「これでよい」と安堵した。

また、もの静かな高校2年生が、「美大に行きたい、工芸科に」ときっぱり言った時、驚きつつ嬉しさも感じた。別の高校2年生は9月末にヨコトリの展示作品《アート・ビン》に1年前に描いた風景画を投棄した。「さっぱりした」そうである。

学校も年齢も異なる中高生が、ふたつの「夏の教室」を通して出会い、共にさまざまな体験をした。この経験から何を得て、どのような変容を遂げていくのだろう。再び3年後のヨコトリで会う機会があれば、さらなる変化を知ってみたいと思う。

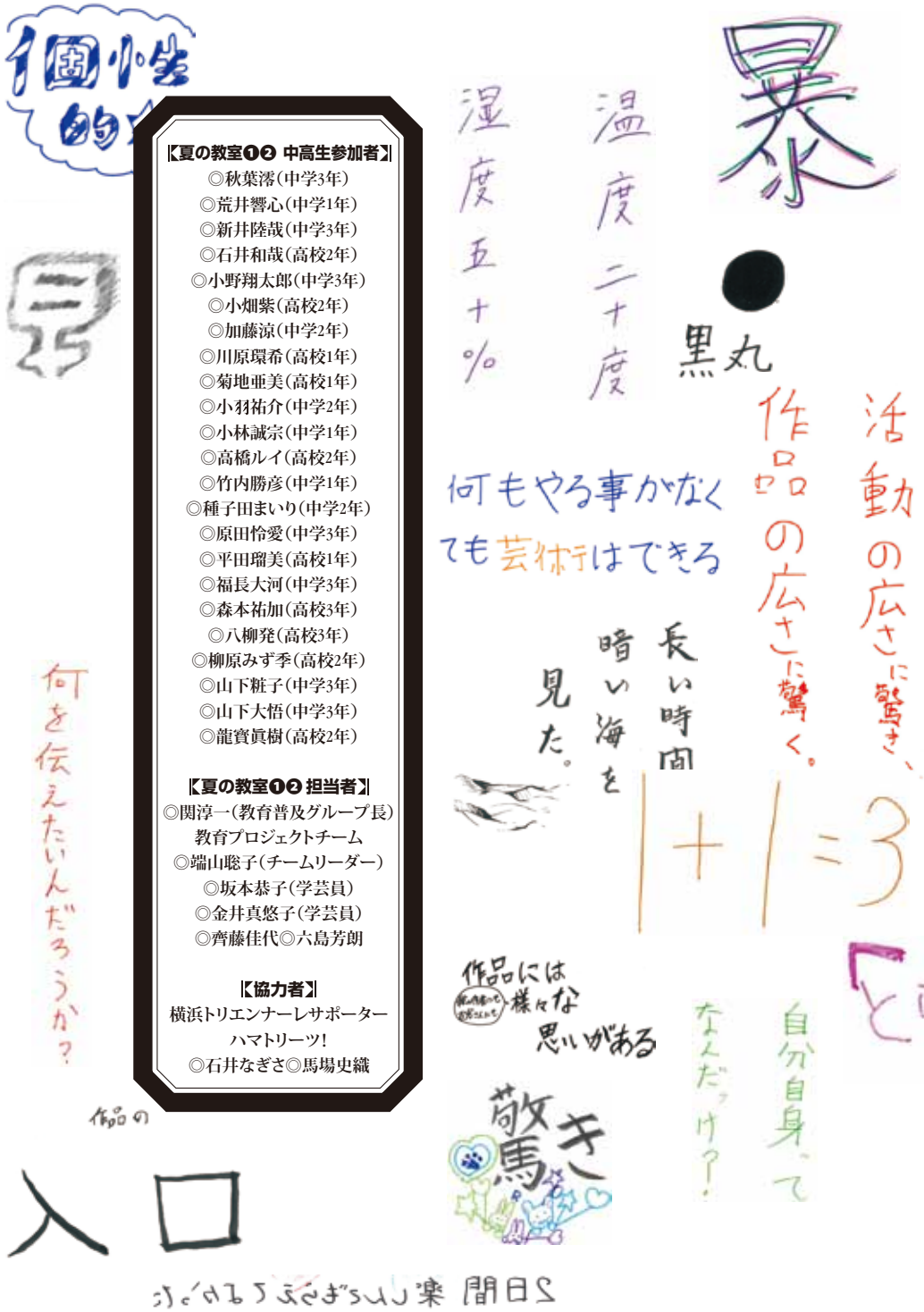
私たち教育普及担当はこのふたつの「夏の教室」の経験から、今後の美術館の教育普及のあるべき姿を考えるきっかけをいくつかいただいた。半年間ありがとう。

横浜美術館 教育プロジェクトチーム チームリーダー
端山聡子

【夏の教室❶❷ 中高生参加者】
◎秋葉澪(中学3年)
◎荒井響心(中学1年)
◎新井陸哉(中学3年)
◎石井和哉(高校2年)
◎小野翔太郎(中学3年)
◎小畑紫(高校2年)
◎加藤涼(中学2年)
◎川原環希(高校1年)
◎菊地亜美(高校1年)
◎小羽祐介(中学2年)
◎小林誠宗(中学1年)
◎高橋ルイ(高校2年)
◎竹内勝彦(中学1年)
◎種子田まいり(中学2年)
◎原田怜愛(中学3年)
◎平田瑠美(高校1年)
◎福長大河(中学3年)
◎森本祐加(高校3年)
◎八柳発(高校3年)
◎柳原みず季(高校2年)
◎山下粧子(中学3年)
◎山下大悟(中学3年)
◎龍賓眞樹(高校2年)

【夏の教室❶❷ 担当者】
◎関淳一(教育普及グループ長)
教育プロジェクトチーム
◎端山聡子(チームリーダー)
◎坂本恭子(学芸員)
◎金井真悠子(学芸員)
◎齊藤佳代◎六島芳朗

【協力者】
横浜トリエンナーレサポーター
ハマトリーツ!
◎石井なぎさ◎馬場史織



今日のヒトコト:各講座終了時(随時)に印象に残った言葉や自分の感想をヒトコトで書き、壁に貼ったもの。この記録誌の随所に散りばめた。

第6・7回 8/11［月］・8/12［火］
ヨコトリ号こども探検隊を計画・準備する

第8・9回 8/18［月］8/19［火］・8/24［日］8/25［月］
ヨコトリ号こども探検隊を実施する

第10・11・12回 9/7［日］・9/14［日］・9/21［日］
記録誌をつくる

YOKOHAMA MUSEUM OF ART

すてるものには
支えがある。

見たこ
しない！
心の目

暑、白、広、大、

視点によって…

ごみ箱＝BIN(ビン)
ごみ＝一つの作品＝再利用

偶然を

ありえへん

緊張

美術館の広さに驚き、

芸

追求する欲望

欲張り
な脳みそ
られない」

終わってみると
さびしいつかれたうれしい

感嘆

気配

秘

ヨコハマトリエンナーレ 2014　教育プログラム
中高生のためのヨコトリ教室
船長の航海日誌
世界の中心には発見の海がある

◎発行：横浜美術館
◎発行日：2014年11月
◎編集：参加の中高生 有志
横浜美術館 教育プロジェクトチーム
◎デザイン：NDCグラフィックス
◎撮影：加藤 健（*マークのついた写真）
◎印刷：株式会社ダイトー